大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

東アジアにおける死の叙情性

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 具, 廷鎬, 村田, 右富実 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005045

東アジアにおける死の叙情性(1)

具　鎬廷
村田　右富実

一、序

本稿は「東アジアにおける死の叙情性に関する研究」の一環として古代日本と韓国の詩歌における死の叙情性を考察しようとするものである。日本の場合は『古事記』の「大御葬歌」や『万葉集』所収の挽歌群から『古今集』以降の哀傷歌に至るまで、豊富な和歌資料を基盤とした着実な研究の進捗を見せている。しかし、韓国側においては日本のような研究基盤が形成されているとはいいがたい。古代文献資料の不足が一因ではあるものの、死者を偲ぶ表現情緒や文学研究の視点が日本のそれとは異なることにも大きな要因があると思われる。

韓国には日本の「挽歌」のように人間の死を哀悼する詩歌を一つの分類として立てることはないが、「輓歌」というジャンルがある。「輓歌」は早く『晋書』に見えるが、同一箇所を「挽歌」とするテキストも存在する。(2) また、『一切経音義』の、「挽出」、(3)「挽住」(4)の記述からも「輓」と「挽」とに弁別的差異が存在したとは考えられない。

しかし、内容面から見た時、両者は異質なものであるといわざるをえない。韓国の「輓歌」はいま現在も伝統的な葬儀の中に生きており、殯所から葬地へ柩を運ぶ人たちによって実際に歌われている。また韓国の「輓歌」は昔から各地方に口伝として伝わっているが、内容や詠歌ぶりにおいて基本的には大同小異であり、その形式は柩を載せた輿の前に立って行列を指揮する人が「輓歌」の一節を先唱すると、輿を担いでいく者同士がその合間に「エエ、エヘヘヤ、エヘ、エヘ、オホホヤ」と繰り返して後唱するものである。一例として珍島(ジンド)地域に伝わってくる「輓歌」を、先唱者の歌詞のみ訳して記す。

どこへ行こうか、どこへ行こうか、深山険路をどうやって行こうか、古老の話を聞くと、黄泉への路は遠いというが、今日その道に立ってみると、家の前の山が北邙なのね、三千甲子東方朔は　三千甲子を生きたが、今日行かれた亡者は、百年も生きていられなかったね、遊んで行こう、休んで行こう、行ってしまったら戻ってこられない道、どうやって行けるか、行けない行かない、どうしても悲しくて行けない、愛する人を置いては行けない、行く行くわたしは行く、行ってしまったら戻ってこられない道、友よ、さようなら、わが子等もさようなら、私はいく、この道を。(5)

内容の上で「今日行かれた亡者は百年も生きていられなかった」という個所は解釈によって死者以外の第三者を主体と考えることも可能であるが、全体としては、死者の立場で歌っているといえよう。この「輓歌」が伝わってくる珍島は韓国の中でもさまざまな無形の文化財が残っていることから、民俗学価値が重視される地方である。就中、上掲の歌は一九八七年八月に全羅南道の無形文化財第十九号として登録されたものである。この例からうかがえるように、韓国の「輓歌」は運柩の際に詠まれる葬送儀礼的な要素が強い。韓国の「輓歌」は実際儀礼において歌われる点に重きがあるのに対し、日本の「挽歌」はその叙情性に中心があるといってよいだろう。また、韓国の「輓歌」は「労働謡」に分類されるに対して日本の挽歌は『万葉集』巻二の一四五番歌「山上臣憶良追和歌一首」の左注に「右の件の歌どもは、柩を挽く時に作るところにあらずといへども、歌の意をなずらふ。この故に挽歌の類に載す」とあるように、「柩を引く時の歌」以外であっても挽歌の類に分類しており、韓国の「輓歌」と日本の「挽歌」との差異は大きい。

したがって、両国の古代詩歌において「死の叙情性」という共通性を導出するために、韓国の「輓歌」と日本の「挽歌」を同一線上にあげて比較考察することそれ相応の困難がつきまとおう。しかし、「挽歌」、「輓歌」という固定化されたカテゴリに縛られることなく、万葉集の一四五番歌の左注がいうように、「柩を引く時の歌」でなくてもそれに準ずるものまで視野の幅を広げて両国の古代歌謡における叙情性をさぐってみることは、方法論的有効性は確保されるであろう。

このような観点から見たとき、「公無渡河歌」は注目に値する。後に詳述するが、この歌は死の叙情性という側面において孝徳紀・斉明紀の歌謡や武烈紀の影媛をめぐる歌謡と、ある共通性を持つと同時に異質性を持つからである。結論を先取りして述

べるならば、孝徳紀・斉明紀の挽歌が中国の挽歌詩の影響を受けつつ、万葉挽歌を経由して後世の哀傷歌へと流れていくように、「公無渡河歌」を韓国の叙情輓歌の始発と捉えたいのである。

もちろん、両者の間には共通性と異質性が存在するのは確かである。しかし、この共異性の問題はある程度相対化できると考える。つまり、中国の挽歌詩という同じ根源から出発した故に生じた共通性が変容し、異質性として現出したと把握したいのである。

こうした観点に基づいて本稿は「公無渡河歌」を初めとする「死の歌」と日本の初期挽歌を考察対象とし、それに漢籍の用例も視野に入れて特に韓国の輓歌と日本の挽歌を挽歌史の流れの上で追究してみたい。

二、「公無渡河歌」の典拠

「公無渡河歌」は韓国の数少ない古代歌謡のひとつである。この歌は、早く後漢の蔡邕撰の『琴操』と晋の崔豹著の『古今注』に見えるが、前者は逸文に確認できるだけである。また、管見によるかぎり現存する『古今注』には歌にかかわる説話的記述のみで歌は収録していない。歌を含んだ説話を確認できる文献として早いものは『楽府詩集』であろう。『楽府詩集』巻二十六の「相和六引」の「箜篌引」には崔豹の『古今注』を引用する形で歌を紹介している。それは次のように纒められよう。

公無渡河は崔豹の古今注に曰く、箜篌引は朝鮮の津卒、霍里子高の妻、麗玉の作である。子高が船にいる時、一人の白髪狂夫が散髪をして酒瓶を下げて乱流を渡ろうとした。その妻がついてきて制止しようとしたが、及ばず、遂に河に堕ちて死んだ。妻は箜篌を引きながら、

君河を渡ることなかれ　君敢へて渡りき　河に堕ちて死にたり　ああ、まさに君を如何にせむ

と歌った。その声は甚だ悽切であった。曲が終わると亦、自ら河に身を投げて死んだ。子高は麗玉に語った。麗玉は悼み、箜篌を引いてその歌を倣って歌った。聞く者は誰もが涙ぐまない者はない。麗玉はその歌を隣の麗容に伝えた。(6)

元来「箜篌引」は古楽府の題名で、始めは後漢の「公無渡河云々」という歌詞に名付けられたもの(7)とされることからも「箜篌引」を「公無渡河歌」と呼んで差支えないだろう。(以下、「公無渡河歌」とする)

「公無渡河歌」が古代朝鮮の作品として注目を浴びたのは十六世紀頃である。当時の学者である権文海（一五三四～九一）が元の陰時夫著『韻府群玉』の体裁を模倣した百科事典『大同韻府群玉』で『古今注』を引用したことがその契機となる。この霍里子高の物語は当時の朝鮮の知識人の間に広く受容されていたらしい。一例をあげると、朝鮮の仁祖朝の文人である張維（一五八七～一六三八）が一六四三（仁祖二一）年刊行した詩文集の『谿谷集』所収五言古詩に「黄兄悦之の死を悼む」という漢詩がある。平素、呼兄呼弟と付き合っていた知人の溺死に心を悼んで詠み祀られた作である。紙幅の都合上、関連個所のみを読み下すと、次のようである。

（前略）河川は増水して天に届くほどであり、飛ぶ大蛇も引っくり返すほどの暴風の中を、髪を振り乱した老人でもないのに、どうして兄はそれを渡ろうとしたのか（中略）慈父は天に向かって痛哭して河のほうへ狂走し、か弱い妻は幼ない子供を抱えて断腸の思いで箜篌詞を詠んだ（後略）

（傍線筆者）[8]

傍線部の表現からみて、この漢詩は「公無渡河歌」の本説取りとさえいえよう。死者を傷む詩歌に「公無渡河歌」をめぐる物語を本説として取っているということは「公無渡河歌」から挽歌的要素を受容していたといってよい。またほぼ同じ時期を生きた朝鮮中期の代表的な学者の一人とされる李睟光（一五六三～一六二八）は著書『芝峯類説（一六一三）』巻十の「古楽府」の個所で、

箜篌引。亦、公無渡河という。楽府序に云く朝鮮津卒、霍子高の妻、麗玉が作った。此の詞は古楽府に載せてあって我が国に伝わらないのは、惜む可きことである。[9]

と説き、古代朝鮮の歌でありながら、所収典籍を中国に依るしかないことを惜しんでいる。朝鮮の資料として当該歌を物語とともに確認できるようになるのは朴趾源の『熱河日記』を待たなければならない。『熱河日記』は朝鮮後期の実学者であった著者の四十四歳の時（一七八〇年）、清国の乾隆帝の七旬祝いの使節の一員として北京を訪問した後に著した一種の見聞録である。その中の「銅蘭渉筆」という個所に、『太平御覽』を引用する形で、公無渡河歌を紹介している。

太平御覽云。漢時霍里子高。朝鮮人也。晨起刺船。見一白首狂夫。被髮携壺。亂流而渡。其妻止之不及。遂溺死。妻乃携箜篌鼓之。歌曰。公無渡河。公終渡河。公淹而死。當奈公何。音甚悽切。曲終亦投　河而死。子高還。以其聲語妻麗玉傷之。引箜篌寫其聲。爲箜篌引。[10]

前掲の『楽府詩集』と比べてみての相違する点は、『楽府詩集』は、「朝鮮津卒、霍里子高」としるしているのに対して、『熱河日記』には霍里子高が朝鮮人であることを明らかにしていることぐらいであろう。また、歌の第三句が『楽府詩集』には「堕河而死」とあり、『熱河日記』には「公淹而死」とあるが、詩句の意味内容にはそれほど変りはない。

従来、「公無渡河歌」に関する韓国内の研究は数少ない古代歌謡であるという、文学史的意義から多数の研究者が論じてきた。そしてその研究の傾向は歌自体より背景説話に関わる問題に重点が置かれていた感がある。たとえば白髪狂夫説話の典拠が漢籍ということから、この歌を果して古代韓国の歌謡とすることは可能なのか、それとも中国のものとすべきかという作品の国籍にかかわる問題が議論されて来たが、これに関しては成基玉が述べるように、漢四郡時代、今の北朝鮮の大同江流域で発生した当該歌が中国に伝えられて楽府に編入されたとてよいであろう。[11] その他さまざまな論究の中で最も頻繁に論争されたことは説話の性格を究明することであった。説話中に登場する散髪の白髪狂夫を酒神と見、夫の死を目にして歌を歌った妻を川の妖精（楽神）と見る説や[12]白髪狂夫を恍惚の境地に陥った巫子と見る説もある。[13] 一方これらのような、神話や祭儀的な側面からの接近でなく、「公無渡河歌」とそれにかかわる説話を歌謡発生期の特性として見るべしとする主張も提起された。[14]

また本稿のように「死の叙情性」という、いわゆる挽歌的な観点から追究しようとした論もある。李完衡は、輓歌の属性を「亡者と生者がともに帯びている死に対する不安・恐怖や恨みを解消させると同時に亡者が感じられるあの世に対する葛藤を解消させるための役割を担うもの」[15]とし、「公無渡河歌」はそのような属性を持つものと見た最初の論である。李妍淑は、「公無渡河歌」はその内容からみて呪術性や儀礼的性格を持つとはいえないものであり、極めて叙情的で私的な歌、一回的な叙情挽歌であると性格づけた。[16] 李氏のいう「一回的な叙情挽歌」という言辞はもう少し説明を要する部分ではあるが、基本的に「公無渡河歌」を叙情挽歌と見なす点については首肯できよう。

それでは「公無渡河歌」から求められる叙情挽歌的な性格は

どのようなものであるか。章を変えて具体的な論を進めていきたい。

三、「公無渡河歌」の挽歌性

『古今注』所収の公無渡河歌に関する事項をあたってみると、ひとつ興味深いことに気づく。それは日本の挽歌に影響したと「薤露蒿里歌」の項目に近接して収録されている点である。『古今注』をもとにした後唐の『中華古今注』には「箜篌引」という項目に続いて二行にわたって「悲歌」という項目内容を載せてから「薤露蒿里歌」の項目を設けている。『古今注』や『楽府詩集』がある程度類聚的性格を持っているということを勘案するならば、「箜篌引」と「薤露蒿里歌」の類似性をここから読み取ることも可能だろう。「公無渡河歌」は溺死した夫の死を悼む妻が哀悼の歌を歌った後、夫につづいて溺れる。その光景を目にした子高の目撃談を聞いた子高の妻が歌ったものである。「公無渡河歌」をめぐる説話と武烈紀所収の鮪と影媛をめぐる歌謡物語や孝徳紀の野中川原史満の歌謡との間には通じるところがあると考えずにはいられないだろう。

皇太子の画策によって乃楽山で殺された鮪臣を葬って帰途に臨み、涙をそそいで「青丹よし乃楽のはさまにししじもの水漬く辺隠り水灌ぐ鮪の若子を漁り出な猪の子」と歌った影媛の歌は夫の溺死を悼み悲しんでその妻が歌った「公無渡河歌」とその状況に類似性を指摘できる。不帰の客になった夫の鮪臣を偲び、「乃楽山の谷間で鹿や猪のようにこもった鮪を漁りださないでおくれ猪よ」と叫ぶ心底には先になくなった夫に対する残された人の痛恨がある。その情は「公無渡河歌」においても同様であるといえよう。「河を渡らないで」と叫ぶ懇切な妻の制止も空しく、結局河を渡ろうとして溺れてしまった夫。後ろからついてきて河に落ちて死んでゆく夫の姿を目の前にした妻が、「ああ、まさに君を如何にせん」と絶叫する「公無渡河歌」の最終句は「鮪を漁りださないでおくれ猪よ」という表現と相通じるものがある。つまり、両者ともに戻れない道に足を踏み出した夫の安否を心配する「残された人の痛恨」が伝わり、村田の言辞を借りれば、「逢えない男（男の生死は別として）を追い求める女性の姿」[17]をうかがわせるものがある。

また「公無渡河歌」には孝徳紀の挽歌とも共通する要素がある。今仮に孝徳紀の歌と「公無渡河歌」の物語的設定を記述の順序にそってまとめてみると、次のようになる。

孝徳紀歌謡	公無渡河歌
1、皇太子が造媛の死を聞いて傷み悲しむ。 2、これに野中川原史満が歌を作って奉る。 3、それを聞いた皇太子は歎き褒める 4、琴を授けて歌わせる	1、霍里子高が二人の死を目撃する 1）白髪狂夫の入水 2）それを見て妻が悲しみ、歌を詠んで入水 2、子高が目撃したことを妻の麗玉に伝える。 3、麗玉が箜篌を抱えて夫から聞き伝えた歌を歌う 4、麗玉は隣の麗容にその歌を伝える

この表を見ると、ここにも一定の共通性が看取できよう。まず状況として両方の歌は死人と直接関係のない、第三者による作である。内田氏は孝徳紀の挽歌が庾信詩の影響下にあったことを述べて「不帰の人となった若い女とそこに残された夫君という状況下でその夫君に代って傷む」ことを指摘している。[18] 状況的な面に注意して内田氏の言辞を援用して「公無渡河歌」に代入してみると、「不帰の人となった白髪狂夫、そこに残された妻、（その妻も間もなく不帰の客になる。）残された狂夫の妻の立場で第三者の麗玉が歌う」ということになるだろう。孝徳紀の挽歌と比べて「公無渡河歌」のほうがより複雑な状況設定にはなっているものの、孝徳紀の歌謡二首が庾信の代人傷往二首と楽府挽歌二首が孝徳紀の挽歌と緊密に対応しているという、いわゆる挽歌の「代作」という図式に公無渡河歌も見事にあてはめられよう。

以上、公無渡河歌にも万葉挽歌の始原と目される紀の歌謡と通うところがあることを述べてきた。「公無渡河歌」も武烈紀や孝徳紀に見える叙情的挽歌の属性をもっているといってよいだろう。「公無渡河歌」は韓国の叙情挽歌の最初のものと位置づけることができよう。

四、韓国における死の叙情性のながれ

ここでしばらく挽歌に関連する漢籍の言辞を検討してみよう。『古今注』の「薤露」と「蒿里」は喪歌であって田横の門人より出たものであり、田横の自殺を悼む門人たちが詠んだ悲歌である。また、武帝の時、李延年がそれを二曲にわけて、「薤路」は王公貴人に送り、「蒿里」は士大夫庶人に送って柩を挽くものにそれを歌わせ、世の中はそれを挽歌と呼んだものとする。[19] そのほか『晋書』には「漢魏の故事に大喪及び大臣の喪に紼を執ることを輓歌といい、漢武帝の時、役人の労歌とする」[20] とある。さらに『左伝』哀公十一年条の、「将戦，公孫夏命其徒歌虞殯」の注の「虞殯は即ち葬送の挽歌、唱を以て必ず死ぬことを示す」[21] という例を見ても、挽歌はもともと労働をともなって歌われた歌であり、『文選』に収録された挽歌詩の内容からも葬儀の儀礼

が連想される。孝徳紀の初期挽歌からは葬儀の儀式を思わせる個所は見つからないものの、歌の内容においても『文選』に見える挽歌詩が「死者主体」の歌に対して日本の挽歌は「薤路」や「蒿里」の歌の影響を受けた「代作」をへて万葉集における挽歌に至り、後世の哀傷歌につながって行く。つまり、日本の挽歌は漢籍に見られるような行動を伴う方向でなく、歌自体の叙情的変容の道程を歩んできたといえよう。

それに対して韓国側の歌はどうであろう。前章の末尾で述べたように、「公無渡河歌」を韓国の叙情挽歌の最初のものとして認めたうえで韓国の「輓歌」もしくは挽歌は「東アジアの死の叙情性」の流れという面からどのように位置づけることができようか。結論を先にいえば、韓国の「死の歌」には葬送儀礼をともなう中国の挽歌詩の面影を忍ばせる一つの流れと日本の挽歌のように「代作」から「非代作」へという、もう一つの流れが併存するといえよう。以下、それらに関して述べていくことにする。

まず、前者の、葬送儀礼をともなう「輓歌」から検討していくことにしよう。ここで序の部分にあげた珍島輓歌をもう一度想起してほしい。韓国では今はほとんど現代的な儀礼に従って葬儀を行っているが、地方へ行くと稀に伝統的な祭儀をおこなうことがある。その時は全国どこでも珍島輓歌に類似した内容の歌を歌って柩を運ぶ。勿論、葬儀の儀礼も大同小異である。

珍島輓歌の内容を見てみよう。「どこへ行こうか、どこへ行こうか」と始まるこの歌は現在でも運柩時に実際歌われる。柩を乗せた輿の先頭に立って葬儀の行列を指揮っている人が先唱すると、柩の載せた輿に繋がっている紐を執っている人たちが後唱するのである。歌の内容からみると、確かに死者自身が歌うような形式である。生前住み慣れた家を去って遠くもないすぐそこにある山に葬られる空しさや百年にも満たない短い寿命のもどかしさ、もう二度と帰ってこられない旅に向かう切なさが淡々と歌われる。その内容はまさに「死者主体」とされる中国の挽歌詩のような傾向を受け継がれていると言わなければならない。

一方、「公無渡河歌」系はどうだろうか。「公無渡河歌」に次ぐものとして「祭亡妹歌」という作品をあげることができよう。「祭亡妹歌」は新羅の郷歌である。歌の内容はその名が示すように亡者の兄である月明師が亡き妹を祭った際に歌った歌である。万葉仮名に当たる新羅の「吏読」で書かれたもので、高麗の僧一然が著した『三国遺事』に収められている。「祭亡妹歌」の作者月明師は新羅の景徳王時の僧侶文人である。『三国遺事』の記

述によると、七六〇（景徳王一九）年四月一日、天に太陽がふたつ現れて十日間もなくならない異変が起きた。その時、「兜卒歌」という歌を詠むことによって異変を解決した人物として登場する。その後妹が亡くなることがあり、妹の魂を慰めるために「祭亡妹歌」を作って祀ったが、急に狂風が起こり、紙銭（葬送の際鬼神をまつるために作る紙の銭。ことがおわると焼いて捨てる）が飛んで西のほうに向かってなくなってしまったという記述とともに歌が載せてある。当該箇所の日本語訳は次のようである。

月明は又嘗て亡くなった妹のために斎を営み、郷歌を作ってそれを祭る。忽ちつむじ風が吹いてきて紙銭を西のほうへ飛ばして無くなるようにした。歌曰く、

生死の路はとどめえず　往くとも言はで逝くならめ
秋告ぐ風に　ここかしこ枝より落つる木の葉はも　いづち行くやは知りがたし　さあれ、行きつく果ては弥陀浄土　また逢ふ日もあらめ　道を修めて期待たん[22]

『三国遺事』の記述を鵜呑みすれば、右の歌は七六〇年以後に作られた歌なので、ちょうど『万葉集』編纂時期同時代の作となる。作者月明師は僧侶文人だけあって、歌全般にわたって仏教の色彩がつよい。誰しもとどめることの出来ない生死の道で、同じ枝から出てきた木の葉でもいつ散るか分からないうちに散ってしまったという表現は亡き妹に対する哀悼の情を比喩的に表現している。後半で西方の極楽でまた逢えることを願って精進するという、残された人としての覚悟がこもっている。ここで注目すべきことは歌が葬送儀礼の一部をなしているということであろう。引用文は亡くなった妹のために仏教慣習による斎を営み、郷歌を作ってそれを祭ったという。これは挽歌の持つ「柩を引くものが歌う歌」という本来の定義領域をすこし拡大解釈することが許されるのであれば、この「祭亡妹歌」も挽歌の本来の領域から変容した仏教的儀礼をともなった挽歌とみなすことも可能ではなかろうか。「公無渡河歌」から「祭亡妹歌」への繋がりは、孝徳紀・斉明紀の挽歌が万葉挽歌へつながる挽歌史的繋がりと等質であるといってよかろう。古朝鮮の白髪狂夫の死をめぐる「公無渡河歌」からは「死者を悼む者の発想を起点として哀傷歌的な叙情挽歌を志向しつつも、その個別の歌の成立には第三者が介在している」[23]という万葉挽歌の側面を読み取ることができるだろう。また、「祭亡妹歌」からは葬儀に伴う行為とともに、「残された者が死者を悼む」という哀傷歌的要

素を含んでいるといえよう。つまり、日本の和歌史に即していうならば、祭亡妹歌は万葉の挽歌が後世の哀傷歌へと定着する過程の一面を推量させるものとして位置づけていいと考えられる。

万葉挽歌以後、文学史において挽歌の後をついで「哀傷歌」が位置づけられるように、韓国側では「祭亡妹歌」を次ぐものとして、「悼二将歌」を上げることができよう。「悼二将歌」は高麗王朝第一六代の王である睿宗一五（一一二〇）年、王の睿宗が西京（今の平壌）で開いた八関会に御幸した時、開国功臣である「申崇謙」と「金楽」という二人の人物を追悼する劇を見て心を打たれ、自ら追悼の情を述べた歌である。八関会は高麗時代に行われた国家的重要行事で、蓮灯会とともに高麗二大国家儀式のひとつであって十月十五日は西京で、十一月十五日には首都の開京（今の開城）で行われた祭天儀式であった。二人の将軍は九二七年、今の大邱付近で高麗開国の祖である王建が甄萱が率いる後百済の軍に包囲たとき、自分たちの命を捨てて王建を救った人物たちである。歌を現代語訳を次にあげる。

危い時に　君を安全に守った　忠誠の志は天上までとどき、魂は去られたが　君が賜った位の重要さも　劇を見てわかった　その時の二人の功臣よ　遠い昔のことだが、その忠誠心は　今も現れる（筆者訳）[24]

この歌は高麗時代に詠まれた歌であるが、新羅の郷歌の後を継ぐ最後の作品として評価される。歌全般にわたって約二百年前に自分たちの命を捨ててまで高麗の太祖になる王建の命を救った二人の将軍の忠義を悼んでいる。ここまで来ると、歌はもはや儀礼的な行為から離れてただ残された人が幽明境を異にした人に対して哀惜の情を述べる哀傷歌と類似するものがある。紙幅の都合上これ以上言及は省くことにするが、見てきたように、この「悼二将歌」の流れは二章で述べた「黄兄悅之の死を悼む」のような朝鮮の漢詩に繋がっていくといえよう。

五、結び

「東アジアにおける死の叙情性」を考える時、「挽歌」や「輓歌」といった従来の分類意識に束縛されることはそれほど望ましくなかろう。既存の分類のカテゴリを克服してより広い視野から「死の詩」の問題に接近して、そこから共通性ないし異質性を考えるほうがより効果的であるといえよう。

そういう観点に立脚して本稿では韓国の「死の歌」を日本の

挽歌との比較検討を通して「東アジア」というカテゴリの中で、どのように位置づけられようかを考察してみた。その結果、韓国における死の歌は二通りに分けることができた。一つは今も韓国の伝統葬儀礼の中に生きていて、「輓歌」という分類に属されるものであり、前に引用した『晋書』の、「漢魏の故事に大喪及び大臣の喪に紼を執ることを輓歌といい、漢武帝の時、役人の勞歌とする」という言辞のような葬礼儀式とともに魏晋の挽歌詩が志向した「死者主体」の趣を持つ流れを汲んでいる類である。

一方、韓国の叙情挽歌系というべき「公無渡河歌」や「祭亡妹歌」、「悼二将歌」のようなものは孝徳紀・斉明紀の初期挽歌から万葉挽歌を経由し、王朝時代の哀傷歌へ至る日本の挽歌史の図式に当てはめられる可能性について述べた。残念なのは韓国側の資料がわずかの数にしか存在しないために、ある程度は推量の域を出ないということである。しかし、日本側の挽歌資料の豊富さが本稿の推論を可能にするのではなかろうか。ある一つのはっきりした判断基準があって、それを判断基準の軸にして周辺事項を推考するという方法論が日韓中という東アジアの死の叙情性を考えるには効果的なものと考えられる。本稿で論じられなかった細部については後稿に期したい。

〔注〕

(1) This work was supported by the National Research Foundation of Korea Grant funded by the Korean Government 8 NRF-2012-013-2012S1A2A1A010291909

(2) 漢魏故事、大喪及大臣之喪、執紼者輓歌。新禮以爲輓歌出於漢武帝役人之勞歌、聲哀切、遂以爲送終之禮（巻二十・志第十・礼中；1974.11・北京：中華書局・p.626）。『二十四史全訳・晋書』(2004.1・上海：漢語大詞典出版社・p.472) では「輓」の箇所を「挽」と表記する。

(3) 『正續一切經音義』：附索引兩種 ・(唐) 慧琳，(遼) 希麟撰・上海：上海古籍出版社・1986.10・巻五九・十二・ウ

(4) 注3の本、巻二〇・七・オ

(5) 『珍島輓歌』：ナ・ギョンス・国立南島国楽院・2007

(6) 一曰公無渡河。崔豹古今注曰。箜篌引者、朝鮮津卒霍里子高妻麗玉所作也。子高船。有一白首狂夫。被髮提壺。亂流而渡。其妻随而止之。不及。遂堕河而死。於是援箜篌歌曰。公無渡河。公竟渡河。堕河而死。當奈公何。聲甚悽慘。作愴。曲終。亦投河而死。子高語麗玉。麗玉傷之。乃引箜篌寫其聲。聞者莫不堕涙飲泣。麗玉傳鄰女麗容。『楽府詩集』・郭茂倩編・台北台湾商務印書館・1968.9

(7) 楽府上、楽府四首、箜篌引の題意・新釈漢文大系『文選』下・明治書院・1986.p.481

(8) (前略) 漲水怒蹴天　黑風翻蛟螭　不是被髮叟　兄何苦渡之
(中略) 慈父哭呼天　狂走長江湄　弱妻領群雛　腸斷箜篌詞
(後略) 『谿谷先生集』第二五巻「五言古詩（哭黄兄悦之）」

(9) 箜篌引。亦曰公無渡河。樂府序云朝鮮津卒霍子高妻麗玉所作。

此詞載於古樂府。而我國無傳者。可惜。『芝峰類說』(上)、世界思想教養全集統十、乙酉文化社・1975.2.

(10)『熱河日記』大東印刷所・昭和七年五月

(11) 成基玉「공무도하가와 한국 서정시 전통（公無渡河歌と韓国の叙情詩の伝統）」・고전시가 엮어 읽기 상・2003・8・太学社・pp.19~4

(12) 鄭炳煜、「주신의 최후（酒神の最後）」『自由文学』42・1960

(13) 趙東一・『韓国文学通史』1・知識産業社・2005・pp.104～106.

(14) 成基玉・前掲論文

(15)「公無渡河歌」と「祭亡妹歌」の輓歌的性格について（語文研究24、語文研究会・1993.10.p.5)

(16) 注『韓日古代文学研究』、「韓日古代挽歌の性格」p.49・2002.9・박이정

(17)「献呈挽歌」、『柿本人麻呂と和歌史』2004.1.p.90.

(18)「孝徳記挽歌二首」『万葉の知――成立と以前』塙選書94・1992.7p.334

(19)「薤露蒿里並喪歌也。出田横門人横自殺、門人傷之爲之悲歌。言人命如薤上之露、易晞滅也。亦謂人死魂魄歸乎蒿里。（略）至孝武時、李延年乃分爲二曲、薤露送王公貴人、蒿里送士大夫庶人、使挽柩者歌之、世呼為挽歌」申鑒・意林・古今注・盛北：盛灣中華書局・1981.9

(20) 前掲の注（1）と同じ。

(21)「虞殯即送葬之挽歌、唱之以示必死」『春秋左伝注』・北京：中華書局、1981.3,p.1662

(22) 三国遺事の原文：明又嘗爲亡妹營齋。作鄕歌祭之。忽有驚飈吹紙錢、飛擧向西而沒。歌曰生死路隱　此矣有阿米次肹伊遣　吾隱去內如辭叱都　毛如云遣去內尼叱古　於內秋察早隱風未　此矣彼矣浮良落尸葉如　一等隱枝良出古　去奴隱處毛冬乎丁　阿也彌陀刹良逢乎　吾道修良待是古如。原文および歌の日本語訳は『完訳三国遺事』（一然著・金思燁訳、1976.4、朝日新聞社、p.399）による。

(23)『柿本人麻呂と和歌史』第二章第一節「挽歌の始発」、村田右富実、和泉書院、2004.4.p.31

(24) 歌本文：主乙完乎白乎　心聞際天乙及昆　魂是去賜矣中　三烏賜敎識麻又欲　望彌阿里刺　及彼可二功臣良　久乃直隱跡烏隱現乎賜丁。『平山申氏系譜』状節公行状

〔く　ちょうほ・韓国中央大教授
むらた　みぎふみ・本学教授〕